山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第３号（1992.3）

幼児の散歩活動で育つ力

ー身近な散歩コースにおける３才児の実態からー

桑　原　昭　徳

Education of Child's Abilities in Walking

Akinori KUWAHARA

キーワード：園外保育，散歩，自然

１．はじめに　――M児との散歩の始まり、散歩の総合的性格

1990年10月10日、快晴の「体育の日」のことである。この日、筆者宅の猫の額ほどの畑に植えたサツマイモを、M児の家族とともに掘ることにしていたのであった。筆者は爽やかな秋の日差しのなかでイモ掘りの準備をしていた。９時50分、筆者を見つけたM児は、唐突に「もう、ぼく、３才になった」と言いながら、右手の３本の指をつきだして教えてくれた。その指の形をよく見ると、それまでの２才をしめす人差し指と中指は真直ぐに伸びているものの、３本目の薬指はまだ真直ぐに伸びきっていない。そばにおられた母親に手伝ってもらって、どうにか３本の指を出すことができたのであった。

M児は1987年９月26日生まれである。だから1990年の10月10日の時点では、３才の誕生日をむかえて２週間が経過したことになる。その２週間のあいだはM児と会うこともできなかったのである。３才になったばかりのころのM児との交際は、年１回の芋掘りや休日に顔を合わせるとき、ないしは時たま見かけることになる朝夕の出勤時の偶然の出会いが主であった。

しかし、1991年の５月（M児３才８か月）になると、M児と出会うチャンスが急に多くなってきた。

そのきっかけとなったのは、筆者宅の玄関にとりつけてあるインターホンである。

幼児にとってインターホンは格好の遊び道具となる。最初のうち、抱きかかえられて「自分の手でボタンを押す」－「音が出る」というだけでも面白いらしく、なんどもボタンを押したがった。つぎに、玄関のボタンを押すと、室内の受話器に人が出てくること、話ができることにも興味を示した。

しかし、３才になったばかりのころは、まだM児の手はインターホンの押しボタンに届かないのであった。だから、インターホンの遊びは、抱きかかえられて玄関のボタンを押して音を楽しんだり、出てきた相手に呼びかけたり、家の中の受話器と玄関先の受話器に別れておたがいに話をしあうなどに限られていた。だから当時、M児が家に上がってきて一緒に遊んだときには、「おじちゃんが、外に出て」というM児の指示にしたがって、主人であるはずの私の方が玄関のインターホンの送話口に出て、文字どおり「主客転倒」の状態で会話が交わされたこともあった。

ところが、1991年の５月ころになって、M児が背伸びをすると自分の手が押しボタンに届くようになり、インターホンの本来の機能が発揮されることになる。インターホンで呼びだされる回数が多くなるにしたがって、筆者も玄関先に出るだけでは物足りなくなり、声を交わすだけではすまなくなる。「散歩に行ってみようか」という言葉がそんな状況のなかで私の口から出たとしか考えられない。

いまから考えると、M児が自分の手で意のままにボタンを押すことができるようになったことが散歩のはじまりの契機であり、さらに散歩活動が活発になる原動力のひとつであったように思われる。いわばインターホンがM児と筆者を「結びつける道具」となり、「人間関係を促進する道具」となったのである。

散歩が定例化すると、筆者にたいする「散歩に行こう」という呼びかけの言葉や、「お母さん、おじちゃんと散歩に行ってくるよ」などの挨拶の言葉も定型化してくる。散歩の終わりには互いに「またね」「さよなら」と挨拶しあったり、母親への「ただいまあ」などの挨拶の言葉も定着しはじめる。当然のことながら散歩の途中でも、さまざまな言葉が交わされることになる。

また、散歩をはじめたばかりのころのM児にとって、細い畦道を「歩くこと」だけでも困難をともなった。最初のころの散歩は、歩くこと自体が目的であったといってよい。ところが散歩も５０回を数えるころになると、スムーズに歩けるようになったばかりではなくて、帰りには走って帰ることもできるようになった。幼児の散歩活動においては身体の運動能力の発達も促進されるのである。

散歩においては、もちろん自然の事物に出会わざるをえない。その自然の事物をめぐって言葉を交わすことにもなるし、出会った事物や事象についての知識も獲得することになる。

このように幼児の散歩には、人との出会い、言葉の交換、バランスをとって歩く・走るなどの身体的活動、自然の事物との出会い、知識の獲得などが含まれている。幼児の散歩は、保育者側からみれば、総合的な教育活動なのである。

幼児の散歩活動における自然の事物との出会いについては、すでに論じているので、本論では、自然との出会いを除いた「散歩で育つそのほかの力」について明らかにする。（注１）

２．言葉表現の習熟①、人との出会いの言葉

M児と筆者が散歩に出かけるきっかけは、ほとんどの場合が「散歩へ行こう」というM児からの誘いの呼びかけである。

たとえば、1991年６月23日（日曜）の散歩は次のようにして始まった。

前日の夕刻の約束どおり、私の方はすでに準備をととのえて家の中で待っているのだが、つぎのような会話が交わされることになる。

午前10時ちょうどに、玄関のインターホンが鳴る。

家人「はい」

M児「桑原のおじちゃんはいる？」

この時点で、外の気配や足音、さらにインターホン経由ではなくて直接外から聞こえてくる声からもM児であることは判明しているのである。しかし、すこしでも多くの人と出会わせたい、すこしでも多くの言葉を使わせたいという筆者自身の願いもあって、できるだけ家人が出

ることになっている。

家人「いるよ。ちょっと待ってね」

桑原「はい、おはようございます。どなたですか」

M児「○○○・○○○です」と自分の氏名をはっきりと言う。

桑原「なんですか」

M児「散歩に行こう。もう朝。もう朝になったよ。おそいよ」と元気よく叫ぶ。

桑原「はい、わかりました。すぐ行くから待ってね」

そんな言葉のやりとりのあと、散歩に出かけたのであった。

散歩の終わりには「またね」と言って別れる。するとM児は自宅の玄関のドアをあけて「ただいまあ」と大きな声をだす。すると母親の「おかえり」という声が聞こえる。その声を聞きとどけたあと、私も大きな声で「ただいまあ」といって自宅に入るのである。

M児がひとりだけで散歩に行くことはない。かならず筆者に言葉をかけ、いっしょに出かけるのである。そのさいには家人とも顔を合わせて、言葉を交わすこともある。散歩の途中では犬をつれた婦人から「お散歩かね」「こんにちは」などの声がかかることもある。散歩の帰りにはかならず「またね」「さよなら」と筆者と言葉を交わし、「ただいまあ」と母親に呼びかける。

幼児は散歩という活動を通して、たくさんの「人との出会いの言葉」に習熟していくのである。

3．言葉表現の習熟②、自然の事物を表わす言葉

散歩が定例化して40日が経過した７月１日には「虫取り網」が加わって、散歩に勢いがついた。チョウやトンボ、魚やオタマジャクシを捕るという目的がはっきりと浮かびあがってきたのであった。

散歩コースでM児が「チョウチョがおる」と言って認めたものは、モンシロチョウ・モンキチョウ・ヤマトシジミ・ヒメジャノメの４種であった。すべて「チョウチョ」というひとつの言葉で表現された。モンシロチョウだけは筆者が「あれは白いからモンシロチョウよ」と名前を教えた。その場では「モンシロチョウ」と言っていたが、そのご筆者のまえでその言葉が再生されることはなかった。そのほかに、ときにキアゲハ・クロアゲハ・アオスジアゲハ・鮮やかなタテハチョウやヒョウモンチョウの仲間も見ることができたが、飛ぶ場所がM児から離れていること、飛ぶ速さが速いことなどの理由により、M児の目に止まることは少なかった。

トンボの仲間では、シオカラトンボ（雌雄）・オオシオカラトンボ（雌雄）・アカネトンボ・マユタテアカネ・オオイトトンボをじっさいに捕ってM児の手に持たせることができた。このほかにオニヤンマ・コシアキトンボ・ショウジョウトンボを見かけることもあった。しかし、チョウの仲間とちがって羽の彩りも少なく、透明であることもあってか、飛んでいる状態でしか見ることのできないこれらのトンボに、M児が気付くことはなかった。

７月１４日には『昆虫図鑑』も加わった。そのころトンボ取りに熱中していたのでM児や小２のH君には「『トンボの本』を買ってきたよ」といって見せた。さっそく興味を見せて、その日のうちにページをめくってくれた。

７月２５日の夕刻、シオカラトンボとオオシオカラトンボの両方の雄を捕ったとき、M児と

小２のＨ君が「調べてみよう」と言いだした。急いで帰宅して、図鑑を調べることになった。M児は、オオシオカラトンボの下の羽の付け根にある黒の模様や色の濃さに気づいたようだ。さっそく「お母さんに見せてくる」と言って図鑑をもって帰っていった。玄関先での会話を聞いていると、図鑑の絵を指差しながら「これがシオカラトンボ、これがオオシオカラトンボ」と言うことができた。

４．散歩をめぐる人間関係

M児にとっての散歩は、自然との出会いである同時に、人との出会いの機会でもあった。

５月下旬に定例化して１０月末までに６０～７０回ばかりの散歩をしているが、ほとんどの場合が筆者と一緒である。

これに、ときに小学校２年生の次男Ｈ君が加わる。小５のＮ君が同行したのは７～８回程度であろうか。散歩コースでは両親は遠くから見守っておられることが多く、どちらかが散歩に同行されたことは１～２回程度であった。

M児の３人兄弟と、知り合いの小学生や幼児たちがカメを探しに出かけていたのを見たことも数度ある。

散歩の途中では、時に犬をつれた婦人、乳児の守りをしている婦人、田んぼの所有者夫婦、ジュズダマの実を集める女児たちと婦人、買い物や勤務の行き帰りの近所の方などに出会うことがあった。

それらの人たちとは必ず挨拶の言葉を交わすようにした。すると必ず言葉・微笑み・まなざし・身ぶり手ぶりなどの「返事」がかえってきた。出会った人たちにたいしてM児が直接的に働きかけることはなかったが、その場を体験し、相手の様子を見ていたはずである。これらは「人との出会い」の経験と習熟にほかならない。

８月６日にM児兄弟３人と母親にもきてもらって筆者宅でケーキを食べることがあった。みんなで話をしているときM児が「おじちゃん、ぼくと仲よしよね」と言った。あまりにも突然の言葉だったので筆者はどうにか「うん、そうよ。友だちよね」と対応するのが精一杯であった。帰りぎわには「ねえねえ、ぼくんちにきいよ」、「うん、いいよ」という会話まですることになった。

９月２５日のことである。この時期には日が暮れるのもはやくなって、M児の家族が帰宅する時刻には、すでにあたりは薄暗くなっている。

１８時１５分、インターホンがなる。家人が「はい」といって受話器をとると、M児の声がする。いつもとちがって、少ししどろもどろの感じの言葉である。

M児「ちょっと、桑原のおじちゃんの顔を見にきた」

桑原「はい？」（M児の言っている言葉の意味が飲込めないので、問い返す）

M児「ちょっと、桑原のおじちゃんの顔を見にきた」

桑原「はいはい、桑原のおじちゃんの顔を見てくれる？」

M児「うん」

桑原、玄関の門灯と電灯をつけながら、「はい、どうぞ、開けてください。こんにちは」

M児「ちょっと、あっちへ行ってみようや」

桑原「あっち？　どこへ？」

M児「お散歩の道」
桑原「お母さんに、行ってきます、言っておいで」
M児「うん。お母さん、桑原のおじちゃんと散歩に行ってくるからね」
母親「はい、どうぞ。気をつけて」

このようにして始まった散歩は、散歩コースの入り口までの10メートルあまりの道のりを、ただ傘をさして歩いただけである。散歩と名付けてよいような内容は何もしていないのである。この時にしたことといえば、M児の傘のなかで、交互におたがいの鼻を３回ずつつまみあってはニッコリとしあうだけで、５分もかからないうちに終わった。この日の散歩は、どう考えても「顔を見ること」が目的であったとしか思えない。

その日は連休の翌日であったから、いつものように帰宅してM児は「散歩にいく」と母親に言ったのであろう。そのとき母親は、おそらく「もう暗いから、ちょっと顔を見るだけよ」などと言われたにちがいない。M児の「ちょっと顔を見にきた」という「しどろもどろ」の言葉の原因は、そうとしか考えられない。この日から「顔を見るだけ」という口実の散歩がスタートした。

これまでの散歩でもそうであったが、いっしょに散歩に行ったということ自体が大事なのであって、散歩で何かに出会い、何かを捕るといった意欲を感じとることのできない日もあった。散歩に行ったということで安定するといった様子であった。

幼児の散歩のなかには、自然と出会うという要素があることも確かであるが、「顔を見る」＝「人と出会う」という大きな要素もあるといえる。

１１月下旬、17時40分になるとすでに暗い。そのなかをM児たちと母親が帰ってきた。久しぶりに顔を合わせたので「ながいこと顔を見とらんから、おじちゃんが抱っこしちゃろう」と言ってM児を抱きかかえてやった。「重くなったねえ。これ以上重くなったらおじちゃんが抱けんようになる。どうしようかねえ」と言うと、M児は「ぼくがおじちゃんを抱いちゃげる」と言ってくれる。どうやら筆者とM児の人間関係は、これから先もまだまだ続くようである。

５．身体の活動能力の発達と習熟

散歩に出かけることによって、新鮮な空気を吸う、外気の温度変化に対して適応する、太陽のもとで光刺激に対処する、足裏に対する刺激を受けるなどのように、散歩活動に関する生理学レベルの健康促進の意義については、たくさんの項目を挙げることができるであろう。

そのうえに、散歩活動は幼児の身体能力を発達させ、習熟させる。

散歩をはじめたばかりのころ、３才８か月のM児にとって、細い畦道を「歩くこと」だけでも困難をともなった。散歩コースの左手には雑草の生えた田の畦がつづき、右手も雑草が茂っていて、その下には側溝がある。幅50センチメートルばかりの散歩コースには石ころが顔を出し、草も生えていて、幼児にとっては必ずしも歩きやすい道ではない。

だから、最初のころの散歩は、筆者と手をつないで歩いたり、筆者が先に歩いて、M児は後ろからついてくるという状態であった。注意深く、ゆっくりと歩みを進め、歩くこと自体が散歩の目的であった。

６月２２日（土曜）の午後、コース③まで散歩した。コース③の終点には一辺３メートルばかりの水たまりがある。小２のH君はこれを「沼」と呼んでいて、危ない場所ということを知っ

ている。だからこの沼の周囲を回ることができるのは小学生のH君以上であって、３歳のM児には「危ないから歩いたらいけんよ」と言うことになっている。しかしこの日は筆者がいたこともあってH君のまねをしてM児も恐る恐る歩みを進めようとする。だから筆者も「落ちたら危ないからね、おじちゃんがいるときだけよ」という約束で１周だけさせることにした。M児は両手を広げてバランスをとりながらゆっくりと歩く。この沼の周囲も、９月以降になると走ってまわることができるようになっている。これも同じコースを散歩することによる「歩き方」の習熟である。

散歩の回数が増えるにしたがって、M児が先を歩きはじめ、徐々に歩き方にも習熟し、虫取り網を持ち、自然の事物にも積極的にかかわるようになった。

９月25日の散歩でM児が「おじちゃん、落ちそうになったら言うてよ」と言って、わざと空をあおぐようにして畦道を歩きはじめた。ふざけ心や甘え心もあったにちがいないが、よそを見ながら歩くことができるほどに慣れてきたのである。そこで筆者が「あっ、落ちるぞ」と言うと、すぐに前を向いてふつうの歩き方をしはじめた。

さらに、散歩も５０回を数えるころになると、帰りには走って帰ることもできるようになった。

10月26日のことであった。季節はずれのカワラナデシコが１輪だけ鮮やかに咲いている。満開のミゾソバの花といっしょにとって筆者が「おばちゃんに持ってかえろう」というと、M児は「ぼくもお母さんに持ってかえりたい」と言う。そこで近くに咲いていたアキノキリンソウとミゾソバの花を折って手渡してやる。すると、M児はひとりで細い畦道を走って帰っていった。散歩はそのまま終わりである。

散歩コース③の帰り道には、高さ４５センチメートル、長さ１０メートルばかりのブロックの低い塀がつづく。M児がこのブロックの上にのぼろうとするが、いちどは失敗してしまう。２度目にのぼって、その上を歩きはじめる。最初のうち落ちそうな感じなので、手で支えてやるが、後半には上手に歩くことができた。筆者が「M君は上手なんじゃねえ」と誉めると、「うん」と得意げであった。

以上のように「歩き方」ひとつをとりあげても、散歩における幼児の身体能力の発達と習熟の様子は目覚ましいものがある。

６．身近な地域の位置関係の認識

９月に入ってからの散歩の帰り道で、M児は「ぼく、こっちから帰る」といって、いつもの散歩コースとはちがった道を通って帰ることが多くなった。わずか２０メートルばかりの別の道であるが、その別道と散歩コースのあいだには１軒の住宅と、塀の役割をする木立があるので、両方の道から互いに見通すことはできない。ということは、両方の道の関係がM児に認識されているということである。

また、散歩コース②の終点の先には新築中の家があった。コースの終点から大人の目で見ても、木立や住宅が障害となって屋根の一部しか見えない。M児はその屋根が「新しい家」のものであると気付いているわけではない。しかし、M児は「新しい家が出来ちょるか見に行こう」と言ったことも３～４度ある。前の体験をもとに、家と散歩道との位置関係を知っているのである。

さらに、M児の家をふくむ10軒ばかりの住宅をかこむ１周の道も知っていて、「こっちからも帰れる」と言ったこともある。いちどM児の案内で、散歩コース③を引き返すのではなくて、遠回りをして帰ってみたが、「そっちじゃないよ、こっちよ」などと言っては上手に筆者を案内をしてくれた。

散歩活動は、幼児に身近な地域の住宅や道の位置関係の認識をも育てている。

10月10日の焼きいものときにM児が友だちの家を「教えてあげる」と言ったので、M児の後をついて行ったことがある。すると、途中の曲がり角から行くべき道の反対方向へ連れていってくれた。それはいつもの散歩コースではなかったので慣れていなかったということも考えられる。

最後の事例は、幼児にとって慣れていないときの位置関係の認識が困難であることを示している。いつもの散歩コースに関係する道の場合には習熟していて、まちがうことはなかった。

７．比べる活動

６月２６日、このころの水田にはイネの苗が伸びている。M児が田んぼのイネを見ながら「米が大きくなったねえ」と言う。そのあとつづけて「ぼくの方が大きい」と言う。イネの高さと自分の背の高さを比べているのである。

散歩活動の初期からつづいた遊びのひとつに、M児のいう「すもう」がある。

オオバコの実のつく穂の部分をからませて、どちらかが切れるまで引っ張りあうのである。たとえば６月23日にはつぎのような「すもう」の場面があった。畦道に生えている大きなオオバコの穂を見つけて、M児が「こいつは強かったなあ」と言う。それまでにしたことのある「すもう」を思い出しているのであろう。そして穂を２本ほど引きぬく。「ねえ、おすもうしようよ」と言う。ふたりで引っ張りあって、M児が勝つ。「おじちゃんの負けだ」と教えてくれる。

この「すもう」で、M児はオオバコの穂を２本ほどぬいて、筆者に１本ほど手渡してくれる。数をかぞえるときの基本となる１対１対応が理解できているし、勝ち負けの理解もできているのである。

10月26日の散歩のときには、畦道で「もう、お花が枯れたね」と言う。緑の草が生えていた畦道は、すでに茶色が混じりはじめた。草の色の変化にM児が気がついたのである。

枯れたオオバコの穂を見つけて「強いツクシがないかなあ」とつぶやく。それまでも何度か遊んできたオオバコの穂が枯れると、あたかも「ツクシ」のように見える。

このオオバコを２本ほど引き抜いて「くわはらのおじちゃん、お相撲しよう、これで」と言って１本を手渡してくれる。たがいに引っ張りあうと筆者の方が切れてしまう。M児は「ぼくの方が勝った！」と言う。

『昆虫図鑑』を購入してからのち、M児たちは「『トンボの本』を見せて」というようになった。回数にして３～４度ではあるが、モノ環境としての『図鑑』が子どもたちに語りかけてくれたのであった。

９月下旬に入ると、散歩コース③の終点のさきの畦道は鮮やかなヒガンバナの花で満開である。とりわけ田の畦、小道の両側にできた３列のヒガンバナの帯は美しい。この時期の散歩のなかでM児が「なにかもって帰ろうや。この花もって帰ろうや」ということがあった。そこでヒガンバナを１本だけ持ってかえることにした。

ヒガンバナは根元から簡単に折れる。最初の１本はM児に手わたす。もう１本ほど取って筆者のものということにした。帰り道でM児が「どっちが大きい？」という。比べてみると、M児の方が少し長い。うれしそうに「僕の方が大きい」という。M児「お母さんに持ってかえる」という。この場合、長さを比べているのに「大きい」と表現している。

背の高さの「大きい・小さい」、オオバコのすもうの「勝ち・負け」、ヒガンバナの茎の「大きい（長い）・小さい（短い）」などのように、散歩活動には物事の比較の場面もある。

８．調べる活動

ヒガンバナを折りとって、あと10メートルばかりで散歩も終わりというところで、とつぜんM児が「絵本にのっていないかね。調べてみよう」と言った。つまり、２か月前に体験したトンボのときと同じように『昆虫図鑑』で調べようというのである。唐突な言葉だったので「のっとるかなあ？」と筆者は返事をする。

この日M児は、はじめて植物を調べてみようといった。大人にとっては、動物と植物はちがう本で調べなくてはならないものであるが、幼児にとっては、採集した物を調べるということにすぎない。つまり、トンボもチョウも、そして草も花も同じ絵本にのっていると考えているのである。帰りながら、自宅に植物図鑑もあることに気が付いた。そこで筆者はインターホーンのボタンを押して、「おばちゃんに言うてごらん」とすすめる。

M児「おばちゃん、ヒガンバナの絵本ある？」

家人が植物図鑑を玄関まで持ってきて調べはじめる。調べるあいだ、M児は玄関先に座って待っている。植物図鑑のヒガンバナの絵の部分が開かれるとM児は「わあ、あった、あった」と喜ぶ。

M児「わあ、すげえ。これと同じじゃ。お母さんに見せてあげよう」と、図鑑をひろげたまま、ヒガンバナといっしょに持ってかえる。

M児宅の玄関をあけると、ちょうど父親が帰られたところである。M児は「おとうさん、ヒガンバナの絵本」と得意になって見せる。さらに玄関で、「おかあさん、これ、ヒガンバナの絵本」と母親に教える。

（話の途中で、ときどき「ヒガンバナ」が「ヒバンガナ」の発音になってしまうことがある）

幼児にとって、実物のヒガンバナと、絵本（図鑑）のなかの絵とが結び付いたことは、よほどうれしかったと見える。

トンボにしろ、ヒガンバナにしろ、調べる本の存在を知ったことも、散歩活動の発展として育むことのできる力のひとつである。

まずは、モノ環境としての図鑑が準備されているかどうかが重要である。そして、図鑑という「モノ環境」をつかって、「調べゴト」をするという「コト環境」が子どもに働きかける影響力も大きい。

９．基本的生活習慣の習熟

散歩に出かけるためには、それなりの準備が必要となる。M児のばあい虫取り網を持ってい

くことが長くつづいた。日曜など比較的時間が長くとれるときの散歩では、事前に服装や帽子、持ちもの、靴などの配慮が十分にしてあった。転倒しても痛くないように、また怪我をしないように厚手の長ズボンを履くこと、歩きやすい運動靴や雨靴などを履くことは「安全の習慣」の内容である。もちろん交通安全の習慣については、家族の人たちも、周囲の大人たちも気をつけたつもりである。

散歩活動は、さまざまな基本的な生活習慣を実践する場でもある。

７月１３日（土曜）の午後のことである。筆者の父親が来宅しているとき、外でM児の声が聞こえた。そこで筆者が「おじいちゃんが来とるよ。見にくる？」と誘うと、すぐに家のなかに入ってきた。幼児にかかると、一面識もない筆者の父親であっても、「見にくる対象」となるのである。父親が「ボクはだれ？」と対応する。M児は「○○○・○○○」ときちんと自分の氏名をいう。しばらくして「３才」という。幼児にとって自分の年令は、やはり特別の意味を持っているようだ。はじめて対面する人の前では、さすがに居心地がよくないのか、しばらくして帰るという。

帰って行った様子であったが、玄関で声がするので見送りにいくと、M児が「靴をそろえておいたからね」という。見ると、筆者の靴をはじめ家族の靴とサンダル４人分がきちんと揃えてあるのであった。

その日のうちに、M児がもういちど来宅することがあった。帰りぎわのM児の言葉は「桑原のおじちゃんも、くつ、ちゃんとそろえておいてよ。すぐはくように（＝すぐはけるように）」であった。

これ以後、筆者もできるだけ玄関の靴を揃えるように気を付けるようになった。

これと同じことが、いつもの散歩の終了時のM児の「ただいまあ」という大きな声の挨拶の場合にもいえるのである。M児の大きな声の「ただいまあ」という挨拶の真似をして、筆者も大きな声の挨拶を心がけている。

大人がすでに忘れてしまったり、無意識のうちに簡略化していたりするような当然の生活習慣は、かえって幼児の身体のうちに原初的なかたちで身についていることが多い。

このように散歩活動においても、さまざまな生活習慣を繰り返して行うことになる。

10. 夢・ファンタジー、自分自身との出会い

６月22日の散歩でM児は、小２のＨ君の真似をして、危ない「沼」の周囲を初めて歩くことになった。M児は両手を広げてバランスをとりながらゆっくりと歩く。歩きおわると嬉しいらしく、筆者の方を向いてにっこりと微笑む。「ぼくも、Ｈ兄ちゃんと同じようにできたでしょ」という感じである。さらにもう１回挑戦しようとする。筆者が「もう１回だけよ」というと、M児は「２回ね」といって２本の指をＶ字形に突き出す。そして危なげな歩き方ではあったが、つづけて２周した。満面に得意の表情を浮かべていた。

この日の２度目の散歩のときに「ぼく、Ｈ君になりたい。強いから」という。幼児にとって、すぐ上の兄Ｈ君はいちばん身近な目標になるのであろう。

６月30日、散歩コース③のそばの緩やかな流れの中で草色のアマガエルが２匹ほど泳いでいる。それを見ていたM児が「ぼく、カエルになりたいな」と言う。つづけて「Ｎ兄ちゃんも、Ｈ兄ちゃんも、お父さんも、お母さんも、桑原のおじちゃんもカエルになれるといいな。いっ

しょに泳げるもん」と夢のようなことを言ってくれる。

7月30日、小学校の先生が来宅中に、M児の兄弟3人が筆者宅にやってくる。魚釣りに行く約束をしていたからである。そのときの大人の話や、ふたりの兄の話を聞いていたからであろうか、M児が不意に「ぼくね、ご飯いっぱい食べたらお父さんになるソ（「お父さんになるよ」の意）」と言った。兄たちのように大きくなりたい、大人のように大きくなりたいという願いをもちながら、その姿と自分を重ね合わせながら今という時間を生きているのだなと思わずにはいられない。

11．まとめ　一散歩活動における保育者の役割

①　幼稚園や保育園における散歩は、遠足や見学と同じように「園外保育」のひとつに位置付けてよい。（注2）園の外に出かけて行くのであるから、ほかの園外保育と同じように、身支度や持ちものの準備、集合のし方、散歩コースの危険個所の有無、行き帰りの交通安全、手洗い・うがいなどの清潔の習慣などには十分な配慮が必要となる。

そのような保育上の基本的な配慮はあるものの、散歩活動のミニマム・エッセンシャルズ（最低必要な指導事項）があると考えてはならない。幼児が散歩でアメンボやザリガニやカメに出会うのは偶然であって、必ず出会わなくてはならないものではない。ほかのどんな小動物であってもよいのである。同じように、散歩が総合的な活動だからといって、いつも地域の人に出会えるとは限らないし、声をかけてもらえるとも限らない。出会う相手が決まっていないのであるから、幼児教育においては常にそうであるが、とりわけ散歩活動においては「ひとつずつ目標をつぶしていく」という発想に立脚してはならない。そうではなくて、偶然にちかい出会いのなかに子どもとともに一回かぎりの新たな事物を発見していくのだという基本的な構えが必要となる。子ども自身の立場から考えれば、「幼児の生活に練習はない」のである。幼児たちは明日の準備のために今日を生活しているわけではない。しかし、幼児の生活を保育者・教師である大人の目から客観的にみれば、練習であり、準備である。大事なことは、練習であること、準備であることを大人や保育者が知っていても、子どもたちに感じさせてはならないということである。子どもの自主的な感性や対応にまかされなければならない。それが幼児の自主生を育てるということである。

また、いわゆる「しつけ」や基本的生活習慣も、主体的な生活者となることによって身につくのである。まさに「生活が陶冶する(Das Leben bildet.)」のである。

②　最近の散歩で、急に釣りにいくことになった。釣りといってもM児の家からは１００メートルも離れていない小川でのハヤ釣りである。これまで3度ばかり体験している。

家を出たばかりの道すがら、M児が、筆者のもっている釣り竿の道糸の途中についているオレンジ色の目印に触りたいと言うので、手に持たせる。すると「ヒモって透明なんじゃね」という。つまり、道糸の部分が透明なんだねというのである。さらに「風も透明、空気も透明。ガレージは透明じゃない」と言葉をつづけた。

この事実から、次のことが推論できる。

予期しないでM児が手にすることになった道糸は、細くて見えにくいので、たしかに「透明」と表現してよい。M児は、この「透明」という言葉をこれまでの生活の中でのなんらかの体験から知っていたのである。そうでないと急にであうことになった「道糸」と「透明」という言

葉が結びつくことはない。さらに、「道糸」が「透明」であるという表現から出発して、「風」にも「空気」にも「ガレージ（の合成樹脂）」にも結合した。新しい事態での新しい物事の結合を「創造」だとすれば、M児のつかった（ヒモ→透明）　（風→透明）、（空気→透明）、（ガレージ→透明）へといたる一連の言語の発展過程は創造的活動といってさしつかえない。これらの創造的な言語表現過程の原動力となったのは、主体的に言語表現をしようとする意欲や態度であり、それまでのM児の全生活をかけた経験なのである。幼児にとって主体的な生活経験がいかに重要であるかをしめす事実である。

幼児にとっての散歩活動は、さまざまな深い経験をもたらす場であることが明らかとなるとともに、そのさいには幼児の主体的な生活が大切であることも明らかとなる。保育者は幼児たちを園の主体的生活者として位置付けることが重要となるのである。

③　幼児の散歩は大人の散歩とちがって、たんなる「散策」ではないし、「気晴らしや健康のために、ぶらぶら歩くこと」でもない。園内で行なうさまざまな保育活動と同じように、保育的・教育的な意味が多くふくまれているのである。散歩には単に新鮮な外気を吸うといった健康上の意味合いがあるばかりではなくて、自然の事物との出会いをとおして言語発達や知的発達のうえで積極的な意味があること、そして社会的・人間関係的レベルにおいても深い意味がある。このことを、まずは保育者・教育者が認識することが重要である。

つぎに、それぞれの地域での散歩活動のおりに幼児が出会うことになる自然の事物や社会的な事象について、できるだけ詳しく正しい知識や認識を保育者自身が習得することである。すくなくとも子どもが気づいたり、目撃したり、触れるような小動物や植物、事象などについては予備知識を持ちたいものである。

そのためには、まずは日ごろから子どもの声や動きに注意して子どもの関心や興味を知ることである。そして、子どもたちの園生活が本物の生活の場となるように、保育者のすべての仕事を向けるべきなのである。幼児にとって園が自分の生活の場となることが最も重要となるのと同じように、保育者みずからが「園生活」を味わい楽しみ、率先して園での主体的生活者となることである。「生活が陶冶する」のは、子どもばかりではなくて、保育者の場合もにもあてはまるのである。

④　散歩コースの小動物や植物などの事物や事象などについて、保育者がたくさんの予備知識を持ったからといって、それらの知識をダイレクトに子どもたちに与えよというのではない。「今日は散歩に行こうね」と誘いさえすれば、あとは散歩コースの「環境」が子どもたちに語りかけてくれて、環境との対応は子どもの感受性や発見に委ねられるのである。大切なことは、散歩コースの設定や実施のタイミングである。

保育や教育の世界では、梅雨の時期の雨の日には「静かに室内で過ごす」という常識が根強く存在している。しかしながら私の散歩活動の体験によれば、雨の日や雨のあとの散歩こそ数多くの小動物や、散歩コースの変化に出会えるチャンスなのである。安全や健康に支障のないかぎり、「雨の日の散歩」や「雨のあとの散歩」をぜひとも勧めたいのである。

散歩コースの「環境」の語りかけに応えて、子どもたちは、驚いたり、首をかしげたり、言葉に出したり、触ったり、捕ったりするであろう。保育者に「なぜ？、なに？」と問いかけるであろう。そのときはじめて名前を教えたり、調べてみようねと対応してやればよいのである。先回りして教え込む必要はない。もっと子どもたちの感性や注意力を信じて、子どもの発する声や表情や動作に目を向けるべきである。

子どもたちとともに、子どもたちの目の高さで、ともに「世界」を見つめ、「世界の不思議

さや素晴らしさ」を発見することである。それと同時に、子どもとの散歩活動をとおして子どもとも向き合い、人間としての子どもから「人間の素晴らしさ」を発見することである。

⑤　幼児教育が「環境を通した教育」であることが強調されるようになって、地域環境の理解や園の環境づくりを進めるための「地域マップづくり」が進んでいる園もある。そのとき、保育者があたかも通勤時に地域を車で通りすぎるように「通過(fahren)」してはならないのである。そうではなくて、あえて言えば車から降りて自分の手足で確かめ、地域を自主的に発見すること、つまり「体験すること(erfahren)」が保育者に求められているのである。

(注)

（1）桑原昭徳論文「幼児と自然環境との関わり　－身近な散歩コースにおける３歳児と自然との出会い　－」、『山口大学教育学部研究論叢』第41巻第３部、０００～０００ページ。

（2）森上史郎・大場幸夫・高野陽・秋山和夫編『最新保育用語辞典』ミネルヴァ書房、58ページ「散歩」の項。